

From Bonnard to Tillmans and Contemporary Artists
Interior Visions

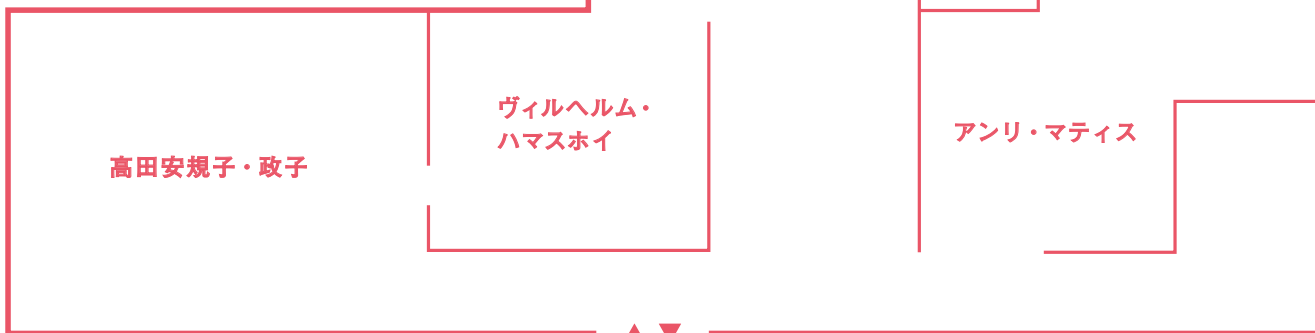
部屋の
みる夢

ボナールからティルマンス、
現代の作家まで

2023.1.28 [Sat] - 7.2 [Sun]

- 本展覧会には決まった順路はありません。会場マップを手がかりに、それぞれの作家たちの「部屋」をめぐるようにお楽しみください。
- 本展覧会では、すべての作品を撮影することができます。但し、フラッシュ、三脚、自撮り棒の使用、動画の撮影、他のお客様のご迷惑になる行為はご遠慮下さい。

B1 第1会場



B2 第2会場



ベルト・モリゾ

ベルト・モリゾ(1841-1895)は、近代生活の情景を素早い筆致で描き出して、高い評価を得た印象派の女性画家です。娘のジュリー(no.3)をはじめとする、家族や友人たちの織りなす親しみに溢れた日常を描き出すうえで彼女が好んで取り上げたのが、ペランダやバルコニーといった、室内と屋外のあいだに位置する空間でした。アトリエにおける伝統的な絵画制作ではなく、明るい色彩による新たな描き方を屋外で試みていたモリゾにとって、外光のなかで親密な室内の情景を描くことができたのが、これらの場所であったのです。

社会に参加する機会の限られていた当時、大半の女性が長い時間を過ごすのが常であったのが、家庭という室内の環境でした。男性の芸術家ばかりが活躍していた時代に、女性の画家として室内と屋外、すなわち家庭と社会との境界を再三にわたって捉えたモリゾの作品は、現代における家庭や暮らしのあり方を見つめ直すきっかけを私たちに与えてくれるでしょう。

ヴィルヘルム・ハマスホイ

デンマークの画家であるヴィルヘルム・ハマスホイ(1864-1916)は、その画歴において370点ほどの作品を残しています。全体の3分の1を占めるのが室内画であり、その大半が制作されたのが、1898年からおよそ10年にわたって画家が居住したストランゲーゼ30番地の住居においてのことです(no.4)。この通りのある旧市街のクレスチャンハウン地区は、コペンハーゲンのなかでも昔日の面影を色濃く残しており、歴史的な建造物やその室内に積み重なる過ぎ去った時間が、ハマスホイの創作の源となりました。

自宅の室内に取材しながらも、モチーフを入念に選択したうえで現実を捨象したハマスホイの室内画は、それゆえに洗練された性格を備えています。日常生活において長い時間をともに過ごし、画家がその性格や魅力を十分に把握していたはずのモデルたち一妹のアナや母であるフレゼレゲ、そして妻のイーダーがひるがえって寡黙であるのも、この性格に拍車をかけています。過去の時間が堆積する現実のなかから、明確な線描と灰色を基調とした限られた色彩のみを抽出して、調和に富んだ室内画を描き出した点にこそ、ハマスホイの独創性があります。

ピエール・ボナール

世紀末のパリでナビ派の一員として活躍したピエール・ボナール(1867-1947)は、生涯にわたり、家族の姿や自宅の室内など身近な対象を取り上げ、姪や甥といった子どもたちや、一家の一員である犬や猫が織りなす何気ない日常の記憶を描き留めました。また1893年に出会いの伴侶となったマルトは、一日に何度も入浴する習慣があり、画家は浴室で身づくろいをする彼女の姿をさまざまな構図や光のもとで描いています。それはボナールにとって多様な表現を試みる格好の主題であると同時に、マルトとのきわめてプライベートな思い出として絵画に刻まれています。

ボナールは、室内を主題とするだけでなく、室内を彩る装飾パネルや屏風等も手掛けています。豊かな自然とそのなかでくつろぐ人々や遊ぶ子どもたちといった情景は、画家の記憶をもとに、ときに空想と混じりあいながら、大画面へと広がっています。こうした幸福なヴィジョンは、部屋の外の開放的な光や空気を纏いながら、部屋のなかで過ごす人々を心地よい夢想へと誘います。

エドゥアール・ヴイヤール

エドゥアール・ヴイヤール(1868-1940)は、1890年代、ボナールらとともにナビ派の芸術家としてパリで活動し、象徴主義演劇の舞台美術なども手掛けました。照明やセットによって場面の状況や人物の心情を巧みに演出する演劇での表現は、絵画にも活かされています。長年母と二人暮らしだったヴイヤールは、自宅で過ごす彼女を登場人物として、穏やかな食卓から重厚な空気を纏う室内まで、明暗の効果を用いることによって、さまざまな物語を想起させる場面を描き出しました。

1900年以降、ヴイヤールは、著名人や上流階級の人々の肖像画の注文を数多く受けました。「肖像画ではなく、自分たちの家にいる人々を描く」という画家の言葉の通り、そこでは、人物だけでなく、彼らの人となりや雄弁に物語る周囲のモチーフや、彼らが過ごす部屋そのものが生き活きと描き出されており、部屋は単なる背景ではなく重要な主題の一部となっています。

アンリ・マティス

1905年のサロン・ドートンヌに大胆な色使いと筆致による作品を展示して「フォーヴ」(野獣)と称されたアンリ・マティス(1869-1954)は、1921年以降、明るい日差しに惹かれ南仏ニースを拠点として活動しました。ときに窓を通して差し込む地中海の光を取り入れつつ、壁掛けや調度、モデルの衣装にまでこだわった室内空間を描いています。こうした要素を自らの手で自在に操作できる部屋は、マティスにとって、色彩や空間の表現を思う存分探究することが可能な制作の現場でした。

マティスの描く部屋には、多くの場合女性のモデルが佇んでいます。画家はモデルたちこそが重要なインスピレーションの源であると語っており、室内で彼女たちと向き合う親密な時間は制作の過程に欠かせないものでした。

画家は晩年、病や戦争といった困難に見舞われ、自由な移動も制限されましたが、若い頃から集めていた気に入りの壁掛けや観葉植物などから色彩と造形の着想を得て、その閉じられた環境で無限の想像力をはばたかせました。

草間彌生

《ベッド、水玉強迫》(no. 30)には、草間彌生(1929-)の芸術を解き明かすためのいくつかの特徴が集約されています。水玉模様の反復は、今日において彼女の代名詞と言えるものですが、モチーフを集積させるという行為はそもそも、幼少期における幻覚や幻聴の経験にゆらいするオブセッション(強迫)に基づいています。寝台に見られるおびただしい数の、布のなかに詰め物を入れた突起物は、いわゆるソフト・スカルプチャー(やわらかい彫刻)の動向に連なるものであり、それらを表面に集積させた家具や日用品のシリーズは、1960年代にアメリカを中心に隆盛したポップ・アートに先駆けていました。

人間が誕生して初めて世界を眺める場所、あるいは衰弱して最後にその瞳を閉じる場所であるベッドとは、それゆえに生と死に深く関連しています。安息を得るための眠りの時間は、夢という無意識と遭遇する機会でもあり、意識の下層に圧縮された記憶に触れるためのベッドという空間のいたるところで、彼女ならではのオブセッションが堰を切ったように展開されています。

ヴォルフガング・ティルマンズ

ドイツ出身のヴォルフガング・ティルマンズ(1968-)は、今日に至るまで第一線で活動を続けている写真家です。1990年代に『i-D』をはじめとする雑誌に掲載された、自らを取り巻く日常を捉えた作品で一躍脚光を浴びて以来、私的な世界を撮影した日記のような写真の舞台として繰り返し登場するのが、ベルリンをはじめとするドイツの各地、そしてニューヨークやロンドンといった活動拠点における住居やアトリエです。

写真というメディアの可能性を最大限に探究しているティルマンズが、室内を撮影する際に窓のモチーフにひときわ注意を払っているのは偶然ではありません。時間によってその表情を変える光を屋外から室内へと導く窓は方形であり、目の前の世界を撮影するためにカメラを覗いた際のフレームと同じかたちをしています。時間や空間、そしてアングルをさまざまに変更して、このかたちによる反復とずれを生じさせながら、ティルマンズは写真そのものの自意識を浮かび上がらせようとしています。

高田安規子・政子

高田安規子・政子(1978-)は一卵性双生児のアーティストユニットで、身近な物や日常風景のスケールを操作し、大きさの尺度や時間感覚における人々の認識を問い直す作品を制作してきました。

本展では、部屋を構成する普遍的な要素である窓や扉をモチーフとしています。無数の窓には閉じられたものと開かれたものが混在し、ステイホーム以降変容してきたパブリックとプライベートの境界を問いかけます。窓の向こうに見える温かな明かりは、それぞれの部屋のなかで織りなされる暮らしを想起させますが、一方で、そのさらに奥には美術館の周りに広がる森が覗き、建物の内と外の関係が揺らぎ始めます。いくつもの小さな窓のなかで、光や風景が移り変わり、時間や季節といった大きな流れが展開しています。鍵を挿したままの大小の扉は、部屋という空間を閉じる／開くという行為と繋がり、徐々に外へと出かけていくことが増え、閉鎖から開放へと向かいつつある私たちの現状を示唆するとともに、向こう側に広がる世界への想像を掻き立てます。

佐藤翠+守山友一郎

佐藤翠(1984-)は、クローゼットを主題とした一連の作品を描き続けてきました。愛着のあるものばかりが収納されるクローゼットは、本来は部屋の住人だけがその扉を開けることのできる私的な空間です。このような場面に植物のモチーフが登場したのは近年のことであり、閉じられた室内と開かれた庭のイメージが重なり合って、装飾的な光景が実現されています。

長年にわたってパリを拠点とした守山友一郎(1984-)は、心が惹かれた旅先の風景や日常の場面を観察して、その奥に潜むもうひとつの世界を描き出します。画面全体に展開する何気のない自然の断片や、馴染みの深い自宅の室内を描いた作品から、眩いばかりの煌めきが放たれているのは、透明感のある薄い油彩の連なりが巧みに扱われているためです。

ふたりの画家による共作を含んだ、室内と自然の関係をあらためて問い直した絵画による今回のインスタレーションは、世界の片隅にある小さな部屋そのものが、現実と記憶のあわいで夢をみているかのような様相を呈しています。

出品作品リスト

ベルト・モリゾ

1 バルコニーの女と子ども

1872年
油彩／カンヴァス
石橋財団アーティゾン美術館
展示期間：5月20日-7月2日

2 テラスにて

1874年
油彩／カンヴァス
東京富士美術館

3 ベランダにて

1884年
油彩／カンヴァス
ポーラ美術館

ヴィルヘルム・ハマスホイ

4 陽光の中で読書する女性、 ストランゲーゼ 30 番地

1899年
油彩／カンヴァス
ポーラ美術館

5 ピアノを弾く妻イーダのいる室内

1910年
油彩／カンヴァス
国立西洋美術館

ピエール・ボナール

6 山羊と遊ぶ子供たち

1899年頃
油彩／カンヴァス
ポーラ美術館

7 りんごつみ

1899年頃
油彩／カンヴァス
ポーラ美術館

8 子供と猫

1906年頃
油彩／カンヴァス
愛知県美術館

9 浴室の裸婦

1907年
油彩／カンヴァス
新潟市美術館
展示期間：1月28日-4月14日

10 浴槽、ブルーのハーモニー

1917年頃
油彩／カンヴァス
ポーラ美術館

11 地中海の庭

1917-1918年
油彩／カンヴァス
ポーラ美術館

12 花

1933年頃
油彩／カンヴァス
国立西洋美術館
(吉井長三氏より寄贈)

13 静物、開いた窓、トルーヴィル

1934年頃
油彩／カンヴァス
アサヒビール大山崎山荘美術館

14 かがみこむ裸婦

1938-1940年
グワッシュ／紙 (カンヴァスに貼付)
ポーラ美術館

15 白い服の少女

1942-1945年
油彩／カンヴァス
ポーラ美術館

16 ミモザのある階段

1946年頃
油彩／カンヴァス
ポーラ美術館

エドゥアール・ヴェイヤール

17 窓辺の女

1898年
油彩／厚紙
愛知県美術館

18 服を脱ぐモデル、 マルゼルブ大通り

1909年頃
ディステンパー／紙 (カンヴァスに貼付)
ポーラ美術館

19 画家のアトリエ

1915年
パステル／紙
ポーラ美術館

20 書斎にて

1927-1928年
油彩／カンヴァス
ヤマザキマザック美術館

アンリ・マティス

21 中国の花瓶

1922年
油彩／カンヴァス
ポーラ美術館

22 紫のハーモニー

1923年
油彩／カンヴァス
ポーラ美術館

23 室内：二人の音楽家

1923年
油彩／カンヴァス
ポーラ美術館

24 窓辺の婦人

1935年
パステル／厚紙
ポーラ美術館

25 襟巻の女

1936年
油彩／カンヴァス
ポーラ美術館

26 リュート

1943年
油彩／カンヴァス
ポーラ美術館

- ・ 出品番号は会場における展示の順序とは異なります。
- ・ 会期中に展示替えがある作品には、展示期間が付されています。

- ・ 佐藤翠 + 守山友一郎のセクションについては、佐藤翠作品に●が、守山友一郎作品に■が、共同には●+■が付されています。

草間彌生

27 コーヒーカップ

1980年
アクリル／カンヴァス
個人蔵

28 南瓜

1981年
アクリル／カンヴァス
個人蔵

29 蝶

2001年
ミクストメディア
個人蔵

30 ベッド、水玉強迫

2002年
ミクストメディア
ポーラ美術館

ヴォルフガング・ティルマンズ

31 14番街

1995年
インクジェットプリント、クリップ
ポーラ美術館

32 窓／カラヴァッジョ

1997年
Cプリント
ポーラ美術館

33 静物、ポーン・エステート

2002年
インクジェットプリント、クリップ
ポーラ美術館

34 スカイプルー

2005年
Cプリント
ポーラ美術館

35 デューラー通り

2009年
Cプリント
ポーラ美術館

36 あふれる光 (a)

2011年
インクジェットプリント(アルミニウムに貼付)、
アーティスト・フレーム
ポーラ美術館

37 あふれる光 (b)

2011年
インクジェットプリント(アルミニウムに貼付)、
アーティスト・フレーム
ポーラ美術館

38 あふれる光 (c)

2011年
インクジェットプリント(アルミニウムに貼付)、
アーティスト・フレーム
ポーラ美術館

39 あふれる光 (d)

2011年
インクジェットプリント(アルミニウムに貼付)、
アーティスト・フレーム
ポーラ美術館

40 草

2014年
インクジェットプリント
(アルミニウム複合版に貼付)、
アーティスト・フレーム
ポーラ美術館

高田安規子・政子

41 Open / Closed

2023年
ドア
12分の1スケールのドア
鍵と鍵穴プレート(64組)
作家蔵

42 Inside-out / Outside-in

2023年
12分の1スケールの窓(180個)
作家蔵

佐藤翠 + 守山友一郎

43 Floating Violas Closet

● 2022年
アクリル、油彩／カンヴァス
作家蔵

44 Anemones by the Window

● 2022年
アクリル、油彩／カンヴァス
作家蔵

45 Light Blue Corner

● 2022年
アクリル、油彩／カンヴァス
作家蔵

46 Pale Pink Corner

● 2022年
アクリル、油彩／カンヴァス
作家蔵

47 Rose Garden Closet

● 2022年
アクリル、油彩／カンヴァス(二曲屏風)
作家蔵

48 Roses at Night

■ 2022年
油彩／カンヴァス
作家蔵

49 Shadow on Rug

■ 2022年
油彩／カンヴァス
作家蔵

50 Sunset on Pansy

■ 2023年
油彩／カンヴァス
作家蔵

51 Cosmos

■ 2022年
油彩／カンヴァス(二曲屏風)
作家蔵

52 Rose Room

●+■ 2022年
アクリル、油彩／カンヴァス
作家蔵